

## 書 評

ピーター・ブラウン（宮島直機訳）『古代末期の世界  
— ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？—』

(Peter Brown, *The World of Late Antiquity. From Marcus Aurelius to Muhammad*, London, 1971) 刀水書房, 2002 年刊

倉 橋 良 伸

### 1

本書は、西洋古代末期研究をリードする著名な研究者のひとりであるピーター・ブラウンの待望の邦訳である。以前より同氏の著書が、数冊にわたり翻訳されるという話は耳にしていたが、なぜか今日に至るまで刊行されていない。やや抽象度の高い文体と博識ぶりが、翻訳者の負担を大きくしているのではないかと推察するが、深読みしすぎであろうか。ともあれ、20冊に迫ろうかという同氏の多くの著書の中で、1冊にせよ日本語で目に出来るのは喜ばしい限りである。

本書は、ピーター・ブラウンの業績の中でも初期のものであり、その後の学界動向や著者本人の研究の進展を考慮すると、これのみを批評の対象とすることは有意味とは思われない。著者自身が本書巻末に掲載された「文献紹介」(219頁)において(1989年に再版された際のもの)、「この本は教科書としてではなく、いわば「読み物」のつもりで書かれたものであり、「古代末期に関する研究は大きく前進し、この本を書いたときには判らなかったことも判るようになった」と述べている。

とはいえ、ピーター・ブラウンの名を学界に広めたのは本書がきっかけであり、その意味で絶好の入門書と呼べる。また、古代末期の地中海世界に関心をもつ初学者にとっても案内書となりうる。そこで、内容の紹介に加え、許された紙面の限りにおいて、我が国も含めて最近の研究

動向についても言及したいと考える。古代末期を研究する際の一助になれば、評者としての責めをふさぐことができるだろう。

本書の構成は以下の通りである（巻末に訳者あとがき・文献紹介・略年表・索引がある）。

はじめに

第1章 古代末期の世界（1 西暦200年頃のローマ帝国・2 新しい支配層の登場・3 4世紀におけるローマ帝国の復興）

第2章 ローマ帝国と宗教（1 新しい宗教の登場・2 都市の危機とキリスト教会・3 哲学者と異教の終焉・4 キリスト教帝国への道・5 修道院とキリスト教の普及）

第3章 西ローマ帝国（1 西ローマ帝国のキリスト教・2 「神聖ローマ帝国」の登場）

第4章 ビザンツ帝国（1 首都コンスタンチノーブルとテオドシウス2世帝～アナスタシオス帝・2 ユスチニアヌス帝とその後継者たち・3 ビザンツ帝国とペルシャ帝国・4 古代世界の終焉）

第5章 イスラム教徒の登場と古代世界の終焉（1 イスラム教の登場・2 イスラム支配下の古代世界）

## 2

さて、西洋史学において、「ヨーロッパの成立」というテーマは、古くて新しいものと言える。それは、アンリ・ピレンヌの著書『マホメットとシャルルマーニュ』により本格的に喚起されたものである\*<sup>1</sup>。我が国でも、研究が紹介されるや大きな影響力をもった。ここで内容を詳述する余裕はないので略述すると、それまでのように西ローマ帝国の滅亡（「ゲルマン民族の大移動」を主因とする）を古代の終焉と見なすのではなく、イスラーム勢力の地中海世界への台頭（特に8世紀におけるアッバース朝の隆盛）とシャルルマーニュ（カール大帝）の戴冠を古代の終焉と見なす歴史認識である\*<sup>2</sup>。

\* 1 邦訳は、アンリ・ピレンヌ（増田四郎監修，中村宏・佐々木克巳訳）『ヨーロッパ世界の誕生』創文社，1960年（原著1937年）。

ところが、その後の研究の進展により、ピレンヌ・テーゼは修正を余儀なくされ、4～8世紀は古代から中世への移行期と見なされるようになった。コンスタンティノポリスを都とする東の帝国は別として、やはり西ローマ帝国の滅亡期における混乱は軽視できず、西方世界は大きく変容しつつあった。つまり、古代の継続と見なしえず、「古代末期」ないしは「中世初期」と見るべきであるという歴史認識へと転換したのである。しかも、研究の深化と細分化は、この時代の全体像をかえって見えにくくしている。

本書の執筆時には、この「ピレンヌ・テーゼ」を踏まえて、「私（筆者）も、800年頃になってはじめて、ヨーロッパ北西部におけるシャルルマーニュの帝国の支配樹立、および、（中略）ハールーン・アル・ラシードのイスラム帝国の興隆とによって、地中海世界の「周縁部」が、地中海という旧来の「中心」を最終的に凌駕するようになった、と考え」ていたという\*3。

ただ、本書の基本スタンスとして特徴的なことは、「私としては西欧世界について触れるつもりは毛頭ない。西欧世界の説明は、それこそ西欧中世史の専門家に任せておけばよいことである」と述べている点である（はじめに5～6頁）。本書で扱われている時代は、明らかに「ピレンヌ・テーゼ」を意識したものである。しかし、西ローマ帝国の滅亡をもって「ヨーロッパの成立」と見る、「テーゼ」以前の認識と異なるだけでなく、シャルルマーニュの登場を「成立」と見るその「テーゼ」とも異なるのである。

本書の意義は、西ローマ帝国の滅亡後も古代地中海世界は継続し、そしてイスラームの台頭により中世への最終的転換が生じるプロセスを、

---

\* 2 近年の研究成果を踏まえたものとして、例えば次のものがある。大月康弘「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国 —コンスタンティノープル・ローマ・フランク関係の変容を中心に—」、『岩波講座世界歴史7 ヨーロッパの誕生 4-10世紀』岩波書店、1998年、213～240頁。

\* 3 ピーター・ブラウン（後藤篤子訳）「古代から中世へ —ポスト帝国期西ヨーロッパにおける中心と周縁—」、『史学雑誌』第108編第6号、1999年、67～75頁。1998年11月に東京大学において開催されたシンポジウム「東西の中世を語る」のために来日した際の基調報告を翻訳したもの。

西地中海地域ではなく東地中海地域に重心をおいて検討しているところにある。さらに重要なのは、古代末期においてローマ帝国がキリスト教を受容することで自己変革を果たしたことを指摘する点である。ピーター・ブラウンの学説の真骨頂は、まさにこの点にある。

### 3

本書の構成に従って、内容を概観する。全体で200頁程度の分量で600年間を扱っているので、実証的な研究書ではなく、パースペクティブを与えてくれる啓蒙書と見るべきである\*4。

第1章では、アントニヌス朝の時代（2世紀末～3世紀初め）にギリシア文化が再生することが強調される。この時期に既にローマ帝国の中心は小アジアのギリシア諸都市に移っており、「ビザンツ帝国」（ローマ帝国がギリシア化したもの）に移行しつつあったという。とりわけ、「中世ヨーロッパで「古典古代」のギリシャ文化と考えられていたものは、じつは2世紀末から3世紀初めにかけて創られたもので、これが500年ものあいだ、医学、自然科学、天文学の知識の宝庫として、ヨーロッパやビザンツ帝国、イスラム教国で学ばれることになった」（10頁）という指摘は重要であろう。

そして、激動期である240～300年に起きた出来事が、のちのローマ帝国のあり方を決定したという。ただし、上述したように、帝国の中心部（地中海周辺）と周辺部（国境地帯）では、「3世紀の危機」の受け止め方はまるで異なっていたという捉え方をする。すなわち、中心部では「危

---

\* 4 多くの著書があるわけだが、ピーター・ブラウンの研究業績で最も注目されたのは、古代末期地中海世界における聖人と聖遺物崇敬である。Peter Brown, *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, 1981, London. さらに、論文集として、*Society and the Holy in late Antiquity*, 1982, London. 本書では触れられなかった、末期古代における西欧世界の展開に関する著者の見解を知ることができる。また、地中海世界全体に関しては、*The Body and Society: Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity*, 1988, New York. なお、邦訳が刊行予定という。

機」の時代にも平和を享受することができたが、周辺部では「すでに平和は遠い過去のことになっていた」(16頁)のである。また、この時代に行われた軍隊編制の変革に筆者は注目する。軍隊の規模が倍増することで生じた「重税が4世紀から5世紀にかけてローマ帝国に変革を迫ることになる」(19頁)からである。

それまで軍隊を統率していた古い支配層(元老院議員層)は後退し、多くの新参者が活躍するようになる。また、元老院を含む官僚組織の中にも古典教養を身に付けた人々が入り込んでいく。ただし、「支配層の交代は無秩序に行われたわけではなかったし、ローマ帝国全体で一気に実現したわけでもなかった」(21頁)と述べ、筆者は斬新なモデルの提起と同時に慎重な姿勢も見せる。従来、後期ローマ帝国(3～6世紀)は「強制国家」であると規定され、職業選択の自由がないなどの社会流動性を欠いていたとするのが一般的な見方であったが、現在では多くの身分に関する法規制とは裏腹に、現実には流動性の高い社会であったと見なされるようになった\*5。筆者は、既にそれを踏まえているのである。

さて、ローマ帝国は、4世紀に復興を遂げるが、それは「新しい環境」(28頁)を伴っていたという。すなわち、税負担の不公平さも手伝い貧富の差が拡大し、大都市の繁栄と引き換えに中小都市の没落が生じたのである。「新しい支配層は、地方に根を張った一族の出身者で占められるようになっていた」(30頁)のであり、彼らは農民の「パトロヌス(庇護者)」として皇帝へのとりなしを行った。

続いて第2章では、ローマ帝国においてキリスト教がどのように受容されていくかを概観する。キリスト教が支配的な宗教になるのは、その素地が既にできていたからである。筆者は、そのことを端的に「個人の内面世界を重視する考え方が生まれてきた」(44頁)と述べる。さらに、「個人の内面世界が独自性を主張するには、同時に孤独な個人を支えてくれる神、「大文字で書かれた単数形の神」が必要になってきた」(45頁)

---

\* 5 社会流動性に関しては、小田謙爾「解体前夜のローマ帝国 遠心力と求心力の葛藤」、歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』(地中海世界史1)、青木書店、2000年、238～261頁を参照されたい。ピーター・ブラウンの見解についても言及されている。

とする。そうした神への需要がキリスト教の普及に先立って発生しており、しかもキリスト教が個人の救済を掲げていたことが大きいという。筆者ならではの活写である。

さらに「当時の司教は、悪魔が作り上げた国家の崩壊を確信した革命家であり、「キリスト教が普及した本当の理由は、キリスト教が悪魔の敗北を確かなものとしたから」(49頁)という刺激的な文章が目飛び込んでくる。筆者は、古代人の心性をこのように喝破して見せるのである。

そして、キリスト教が普及したのが帝国の東部においてであったのは、「危機の影響を受けなかった地域では繁栄が持続し、したがって知的な活動も活発であった」(74～75頁)からと見る。

付言するなら、『新約聖書』が、地中海東部において広く話されていたギリシア語で書かれたのも、大切なポイントとなろう\*6。ただし、古典教養を有する支配層が、キリスト教徒に早々と取って代わられたわけではないことは既に見た。「今度は都市の支配層が二つに分かれて対立するようになった」(78頁)のである。この「対立」の画期は「背教者」ユリアヌス帝であった。筆者は、「もし彼が長生きをしていれば、ローマ帝国の支配層はキリスト教を放棄していたことだろう」(85頁)と述べ、キリスト教が帝国の支配層を取り込むまでには、多くの紆余曲折があったことを強調する。

さらに、古代末期において修道院が果たした役割を禁欲生活を送った修道士たちの活躍を通じて取り上げる。修道士たちは、時として民衆を扇動し異教徒に対する激しい攻撃を行わせた。また、帝国では重税に反発する都市の暴動が続発しており、皇帝は無秩序状態を収めるために司教の協力を必要としたという。武力による鎮圧には限界があり、「修道士を自由に動員できた司教の影響力は絶大であった」(98頁)と指摘する。こうした状況が、4世紀末のキリスト教の国教化をもたらすわけである。

---

\* 6 加藤隆『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』、大修館書店、1999年。

## 4

第3章では、西ローマ帝国におけるキリスト教の普及と滅亡に至る経緯が述べられる。キリスト教徒が置かれた境遇は東方とは大きく異なり、セナトル貴族層が新しい支配層として君臨していて、「少数派としての歴史の長さは東部以上で、キリスト教徒は東部以上に閉鎖的なエリート集団となっていた」(109頁)という。「西ローマ帝国が崩壊した理由としては、モラルの低下や経済の後進性などさまざまなことが考えられるが、最大の理由は380年から410年にかけて、セナトル貴族と教会が軍隊や役人と絆を断ってしまったことにあった」(111頁)という主張は、やや短絡的だがほぼ受け入れられる\*7。

そして、日本では馴染みの薄い分野であるので特に引用したいのは、「5世紀初めに起きたという「野蛮人の侵略」の実態は、恒常的でもなければ破壊的なものでもなく、征服を目指したものでもなかった。いわば、貧しい北の人間が豊かな南を目指した「ゴールドラッシュ」とでも呼べるものに過ぎなかった」(115頁)とする一節である。専門家は別として、ゲルマン民族による西ローマ帝国の破壊・征服というイメージが、我が国において払拭されるのはいつのことであろうか。

さて、西ローマ帝国内に移住したゲルマン諸族は、フランク族を例外として、ローマ人から同化を拒否されたために、「支配者として自分たちだけの世界に閉じこもるしかなかった」(118頁)という。

なお、「神聖ローマ帝国」とは、ユスティニアヌス帝による再征服の結果として成立した帝国をここでは指している。「シャルルマーニュが「ローマ帝国」を再興したとき、そのモデルとされたのは「アウグスツスの帝国」ではなく、「ユスティニアヌスの帝国」であった」(128頁)のである。

第4章では、テオドシウス2世の時代(5世紀前半)にコンスタンティノポリスが帝都として機能するようになったこと、そして5世紀末に軍

---

\*7 詳しくは、後藤篤子「古代末期のガリア」、\*2と同書、159～186頁を参照。

隊が政治的影響力を低下させたことが指摘される。これらのことも専門家には周知のことではあるが、一般には知られていない事実である。いまだに330年にコンスタンティヌス1世により「遷都」が行われたと記す出版物が多いのは、どうしてであろうか\*8。ともあれ、アナスタシウスとユスティニアヌスの二人の皇帝の時代に、「古典教養と統治術を身につけた文民の支配層が登場してくるようになった」(134頁)ことは記憶されるべきである。

やがてコンスタンティノポリスは、「政治的な首都」から「宗教的な聖都」に変わり、5世紀末から6世紀にかけて宗教論争が盛んになっていくと述べる。こうした論争がビザンツ帝国の分裂の原因となったとよく言われるが(特に後にイスラーム勢力により征服された中東で唱えられた単性論派)、「帝国を分裂させかねないような教義をめぐる激しい争いであったにもかかわらず、帝国が分裂しなかった事実注目すべき」(141頁)という。それは、「よく統合された行政制度」(142頁)のおかげとする。

ところが、ユスティニアヌス帝が「個人的に行政官を任命するようになったおかげで、伝統的な官僚制度が機能不全に陥ることになった」(152頁)と指摘する。同帝を「専制君主」として位置づけるのは古い歴史認識だが、彼の後継者の時代が大きな転換期に相当するという認識は評者も共有できる。

続いてビザンツ帝国とペルシア帝国の交渉が取り上げられる。我が国では、ササン朝ペルシアについて知られるところは全く不十分である。ローマ(ビザンツ)帝国にとって最大の脅威は常にペルシア帝国であり続けたことは、古代末期の地中海世界を考察する上で不可欠である\*9。筆者の重要な指摘を一点のみ挙げておくと、「メソポタミア地方は、ペルシャ人貴族にとって異郷であった」(158頁)というものである。ところ

---

\*8 拙稿「後期ローマ帝国と皇帝理念」、\*5と同書、292～321頁を参照されたい。

\*9 ササン朝ペルシアが帝国にとりいかなる存在であったかは、拙稿「後期ローマ帝国とササン朝ペルシア 一地政学的観点から見た両国の抗争の実相一」、倉橋良伸・田村孝 他編『躍動する古代ローマ世界 支配と解放運動をめぐる』、理想社、2002年、289～323頁を詳しくは参照されたい。



が、「5世紀末になるとイラン高原にあった伝統的な貴族の世界が崩壊し、ペルシャ帝国の中心はメソポタミア地方のクテシホンに移ることになった」(161頁)という。

ただ、末期古代の中東に関する研究の進展には著しいものがあり、イスラームの侵攻の前にペルシアとローマ(ビザンツ)が屈服せざるを得なかった理由に関する見解は今日では受け入れがたい\*<sup>10</sup>。

筆者は、本章の最後で「古代世界の終焉」という項目を立て、西方を含む地中海世界にとって、古代とは何であったかが概観される。7世紀になると、ヨーロッパではその主たる担い手であった司教たちでさえ、古典教養を軽視するようになり、「古代世界は自然消滅」(172頁)していくという。そして、7世紀前半には「ローマ帝国」は帝都の「城壁のなかに押し込められていた」(181頁)とする。

第5章は全体で10数頁に過ぎない。もはや与えられた紙面も尽きようとしているので、2点だけ取り上げる。8世紀になるとアラブ帝国においても、ローマ帝国がたどったように、伝統的な支配層であるアラブ人は退場を迫られ、非アラブ人が支配層を形成するようになったこと。そして、筆者が「アラブ人によって征服戦争が戦われていた7世紀ではなく、7世紀末から8世紀初めをヨーロッパと近東の転換期とするのは、アラブ軍がビザンツ帝国を制覇できなかったという事実を重視するからである」(196頁)としていることである。これは、現在でも注目に値する着眼である。

## 5

本書の特筆すべき長所として、126点にも及ぶ図版が掲載され、多数のフレスコ画やレリーフ、そして彫像などが紹介されていて、特に文化的変容を視覚的に理解するのに役立っている。また、それぞれの図版に丁寧な解説が施されているのがあるがありがたい。

邦訳に関しては、どうしても固有名詞の表記が気になってしまうが、

---

\*10 例えば、*The Byzantine and Early Islamic Near East I~III*, Princeton, 1992~1995.

「アウグスツス」(アウグストゥス)や「ツキデデス」(トゥキュディデス)といったものは、本書の価値からすれば等閑にできよう。また、本書には註がないことも残念であるが、巻末の「文献紹介」で補われている。

本書の意義を十分に説明できたどうか不安も残るが、古代末期を知る際の基本文献であることが少しでも広く認知されたなら、非力な評者としてはお許し頂けるのではないかと考える次第である。